



ロータリーは機会の扉を開く

ホルガー・クナーク  
国際ロータリー2020-21年度会長

第2510地区 第11グループ  
函館東ロータリークラブ

会報 2020~2021

- 例会場/ホテル函館ロイヤル TEL (0138) 26-8181 (代)
- 例会日/毎週火曜日 12:30~13:30
- 事務所/ニチロビル4F TEL (0138) 23-3870 FAX (0138) 22-2251
- 会長/佐藤真一 ●副会長/吉川達也
- 幹事/新保栄子
- 友好クラブ/長崎東ロータリークラブ

第3052回 4月27日(火)

本日の  
プログラム

「観桜例会」12:30~  
於:伏白稻荷神社 弓弦葉

次週の  
プログラム  
4月27日(火)

「フラワーアレンジメント例会」  
(有)雄喜フラワーデザインスタジオ  
代表取締役 佐藤 雄喜 会員

**結束** 今できる奉仕と  
友情の輪を広げよう  
2020~2021年度 会長 佐藤 真一

第3051回例会 2021年4月20日(火) 天候 晴

月間テーマ 母子の健康月間

■ロータリーソング それでこそロータリー

■司会 吉川 達也 副会長

■ゲスト 国際交流センター  
事務局長 池田 誠 氏

■会長報告

1、佐々木会員  
転勤の為退会



■幹事報告

- 1、当クラブ次週27日の例会は移動例会に変更。また、5月4日は祝日休会です。
- 2、他クラブ例会変更:30日(金)函館五稜郭RC、5月6日(木)函館RCは共に自主休会。

「函館から全国に広がった  
草の根国際交流 その40年」

国際交流センター 事務局長 池田 誠 氏

HIF40周年を経て、そしてこれから歩むべき道

1979年夏、アメリカから来た16名の留学生は七飯町の農家に2週間ホームステイをした。日本語もあまりわからない、日本食も食べたことがない、寝るのに畳は初めてだ。そんなてんやわんやな状態で、留学生を受け入れた日本の家族たち。それでも、お別れの時になると泣き出す子どもたちや、家族と抱き合う光景があちこちに。

国に頼った国際交流ではなく、民力による多様な文化を取り込んだ無形の学園の促進、そして、民力による魅力ある豊かな多様な社会の実現だ。

これまで、留学生のホームステイ、日本語教育、国際協力、インバウンド対応などの国際活動から、環境保全、自立支援、子ども食堂、まちづくりなどを行ってきた40年間。一言でいうなら、違いの受入であり、組み合わせであり、合意形成だったのだと言えるのではないだろうか。そんな中で、これからの歩むべき道がいくつか考えられるもの

がある。

ひとつは、今までの経験を活かした「マッチング」だ。留学生とホストファミリーだけではなく、若者の就労だったり、子ども食堂だったり、必要などころに必要なことを届けるマッチングだ。

2つ目が、「共に支え合う社会づくり」の実現だ。外国人だけではなく、障がい者、あるいはマイノリティと言われる立場の人たちも含めて共生する社会づくり。そして、3つ目が、新規課題へのアプローチだ。

HIFの歴史は、ホームステイによって、地域に無形の学園を形成するとスローガンを掲げたように、チャレンジなくして今の形はあり得なかった。淀まず流れ続ける清流のように、新規課題に向き合ってゆくこと。そのひとつが、今年から始まる「亀尾ふれあいの里」農園の運営管理だ。

40年は、世代を越える年月でもあり、人の歴史の中ではそれなりに長い期間だ。しかし、組織にとってみればまだまだやれることを残している。次の世代のために残したいもの、そして伝えてゆきたいもの。いろいろなものを、育ててゆくことこそ、これからの大きなテーマになるに違いないと心に刻みたい。



私たちが歩んで来た道、これから歩むべき道。



【インバウンド事業】

国際観光都市として、国際交流の観点から、観光に関わる事業を行います。2014年からダイアモンドプリンセスをはじめとした外国クルーズのインフォメーションデスクを開設し、多言語対応をしています。また、国内外の観光客に対応する観光ボランティア育成セミナーを開催し、観光客の意向調査なども行っています。観光業者向け営業サービスを提供したり、イスラム圏観光客などに対して「ハラールマップ」を作成するなど、インバウンド促進のための活動を行っています。



2014年、観光センターへ集まる。

【外国人研修事業】

ホームステイ事業で対外的地域のネットワークや情報をも活用し、様々な外国人研修生のプログラムを運営しています。1990年代にタイ政府からの技術研修、ロシア東部地域の水産研修を受け入れたほか、2001年からは東北圏の青少年交流事業、JICAの地方行政・産業・社会福祉・助産教育など幅広い分野の研修、21世紀東アジア青少年交流(JENISSYS)、(一財)共立国際交流財団との連携事業など、様々なプログラムを実施しています。



2014年、内閣府(国際交流センター)で研修生。

【生活困窮者自立支援事業】

2015年の生活困窮者自立支援法による生活や就労のサポート事業で、「生活就労サポートセンター」として、渡島、雄勝管内で自立支援を行っています。それぞれの管内で相談窓口を設けると同時に、定期的に町材での相談や個別面談と連携し、アウトリーチも行っています。また、生活困窮世帯の子どもの学習・生活支援も行い、訪問支援、拠点型支援、通信教育支援、および保護者に対する相談など、個別の状況に合わせてサポートしています。

【フリースペース『ヨリドコロ』】

2015年度より、若者(18〜39歳)が自由に過ごせる空間、「居場所づくり」のために、フリースペース『ヨリドコロ』を開設しました。さまざまな悩みを抱える若者たちの自殺防止などを目的に、「ヨリドコロ」を開催しています。中期的就労支援、居場所を提供したと共に関係ネットワークももって、あらゆる形で目に向かえるよう、支援しています。



2015年、ヨリドコロの活動。

【海外サポート事業】

留学、海外ボランティアなどに対して、渡航に関する情報提供や相談業務を行っています。2013年には、セミナーや相談業務を行う「グローバルキャリアサポート企画」を開設、ワークキャンプの拠点として「北海道ワークキャンプセンター」も開設し、国内外からの参加者をサポートしています。また、日本の小学生が外国人留学生と触れ合う「ニセコ留学」も開催、国際交流やアウトドア体験をすることで、海外に関心を促す次世代育成を行っています。



2014年、海外サポート事業。



2014年、海外サポート事業。

【人材育成 自立支援】

「ここでは若者サポートステーション」のスタートを契機に、国際交流で培った経験を活かして若者の就労支援に取り組んでいます。加えて、生活困窮者の自立支援や学習支援、子ども食堂、海外で学んだ力を使い人への情報提供を行う「グローバルキャリアサポート企画」など、活動は大きな広がりを見せています。

【若者就労サポート事業】

国際交流事業を行う中で、留学生とホストファミリーとの異文化体験をサポートし、また数多くのホームステイをマッチングしてきた経験を活かしてスタートしたのが「地域若者サポートステーション」事業です。これは15歳から39歳までの若者に、「自己肯定感の高め」、「視野を広げる」ことで、新しいチャンスを見つけ、就労へつなげよう」と、キャリアコンサルタントを中心に交流を行いました。



2014年、若者就労サポート事業。

【ここに子ども食堂】

本県児童や児童のうちに社会とのつながりをつくることで、健全な青少年育成につなげるための事業です。毎週金曜日、子どもたちも無償で食事を提供する「子ども食堂」をオープンしています。温かい手づくりの料理をみんなで食べる場は、子どもや保護者の新たな「居場所づくり」にもなります。食材の提供や調理などの多くのボランティアの協力のもと、地域全体で子どもたちを育てようという意識を醸成させていきたいと思います。また、子ども食堂に囲むシンポジウムも行い、北海道全体の子ども食堂ネットワーク形成を目指しています。

社会のさまざまな問題を改善していくためには、地域としてどう捉え、どう向き合えばよいか……。それがHIFが発行している情報誌『@h(アット・エイチ)』の編集テーマです。ほかに、函館市青少年研修センターの運営や大沼の環境保全活動、SDGs推進事業等、地域社会とのネットワークの構築、情報発信等を進めています。

【函館市青少年研修センター(ふるる函館) 運営事業】

2015年度より、ワークスコープ西との共同事業により「ふるる函館」の運営を行います。小学校などの研修旅行はもちろん、大学や企業の研修の場としても活用されています。これをきっかけに、多世代交流を行うワークスコープ西と国際交流を中心に行うHIFとのコラボ事業も生まれ、多言語講座や、児童との交流、次世代育成セミナーなどが行われています。

【『キッチン八幡坂』運営事業】

『キッチン八幡坂』は、ロシア樺太連邦総合大学函館校の学生食堂運営事業として2014年度からスタートしました。学生はもちろん、一般の市民も利用できます。10月10日の2か月間は、外国人学生たちが多く利用するため、国際色豊かな交流の場となりました。「ポルチゴ定食」をはじめ、さまざまな工夫を凝らしたメニューも魅力です。



2014年、キッチン八幡坂の活動。

次々と先進的な道を切り開いた日本の国際交流の先駆者ともいえる存在で、その行動は私の糧でもありました。2001年にHIFの職員になりましたが、社長氏から「あなたの経験は国際舞台では活躍できる。それよりも地域の課題に向き合った方がいい」と言われたことは、正直、ショックを受けました。しかし、そこは表面に受け止めて、ならば地域でしかできないことをやろうと考えたんです。以前在籍した共働者研修会場の「ハンディキャップを持った人たちの暮らし」の中でも、地域の課題をいろいろ感じていました。その経験も踏まえ、「国際交流の視点で地域課題に向き合う」というのが私の新たなテーマになりました。

——国際交流を進める上で、大変なことは何でしょう。  
池田 交流事業は社会の批判に直面しやすいものです。とりわけ1995年は大変でした。1月に脱神道院脱法、3月に地下鉄サリン事件、6月には函館でハイジャック事件があり、日本の安全神話の崩壊が叫ばれた年です。海外でも日本に対する不安が広がり、「国際交流のついで」の参加者も少ない年

北海道全域で400人規模の留学生を受け入れていたものを、2000年、地域を道南に絞り、人数も100名に絞りました。ホームステイのマッチングでトラブルがあった場合に十分に対応できないことや、ホストファミリーがなかなか集まらなかったことが主な理由でした。

——これから発展する新規事業もあると思います。  
池田 2000年度までは、「国際交流のついで」と「日本語文化講座」の2つの事業が中心で、夏以外の時期はその準備や報告書作成に充てていました。参加した留学生たちにも、「私たちが北海道にいない理由は何をしているんですか」と心配されたり(笑)。実際、夏以外は国際交流について発信することもほとんどなく、いくつかの事業の柱の構築はいつも課題としてありました。

2001年度の函館市事業「メッセ」を青少年リーダー部へいり、2002年度の「共立国際交流財団」の留学生研修、2003年度の「まっす」(函館)などの新規事業を立ち上げました。また、HIF25周年を記念して開いたシンポジウム(2003年)が、事業拡大への分岐点だったと思います。HIFの

池田 「ホームステイによって、地域と社会を繋ぎ、そんなスローガンのもと、HIFはこれまで多くのホストファミリーやボランティアの人たちの協力を仰いできました。それが今、国際事業、生活困窮者支援や就労支援、あるいは青少年就労の運営、あるいは環境、人権、観光など、多分野で様々な事業を行うようになって、当初の目的がぼやけてしまっているのではないかと懸念しています。もちろん、国際的な視点で地域課題に向き合うという精神は変わりませんが、みなさんに理解していただける明確なビジョンが必要だと感じています。多様な共に取り組む社会づくりを掲げてはいますが、これをより強く、わかりやすく発信していく必要があるでしょう。もうひとつは、設立当初に掲げた「変化・変容・変革」を社会にもたらす運動であり、ということでは、社会を動かす、変えたい活動こそHIFの目指すところであり、もう一度その精神を呼び起こすことだと考えます。

——HIFの今後の展望を聞かせてください。  
池田 今、3つのテーマを思い描いています。

40年の年月に込められた思いを再度認識し、新しい時代の流れも受け入れていく。——HIF専務理事・池田 誠



2014年、国際交流センターの活動。



2014年、国際交流センターの活動。



2014年、国際交流センターの活動。



2014年、国際交流センターの活動。

■ニコニコボックス  
新保幹事 国際交流センター事務局長池田様、本日はよろしくお願ひ致します。  
松井会員、外崎会員 桜が咲きました。

■広告料  
(有)ビエフネット 番場優会員  
■出席報告  
・4月20日(火) 会員37名中 出席27名

労働行政事務代行 原事務所  
原 隆俊 会員  
中島町17-1 電話 53-5555

藤商事(株)  
長谷川 浩之 会員  
北斗市七重浜7-13-4 電話49-4031